

第11回近畿学校保健学会通信

462

昭和39年5月 日 発行
第11回近畿学校保健学会事務局
京都市左京区吉田二本松町
京都大学教養部保健体育学教室
TEL (77) 8111 内 773

学校保健もオリンピックに参加しよう

大阪府学校保健会顧問

学校医 長谷川 等

近づきつつある世界の美と力の祭典、東京オリンピックを控えて、花形大選手の速成に性急なまでの大急務だ。誰れも認め、日本の凡てのスポーツマンをもつて自認する群れは「まかせとけ」の独走の感がないでもない。この日本には今2000万を超える若人がいる。この日本人層を忘れてもらいたくない。東京オリンピックこそ、この日本人づくりの逞しさを世界の人に見てもらふ好機でもある。とはいえ、果して今の日本に新しいスポーツ指導が行われているであろうか。わが国のスポーツ人口を拡大する運動が実施されているであろうか。この事を最大の急務であろう。

スポーツ人口の構築には、この逞しく育ちつつある健康な2000万の子ども達すべてをもつてせねばならない。この日本人層のなかからこそ世界的な大選手が続出するであろうし、すべてに優れた偉大な世界的な日本人も輩出するであろうことを信じている。

従つて、私どもはこの次のオリンピックにこそ期待をもち、自信をもつて、偉大なる日本人選手を用意せねばならぬと思う。この理想的な、人間性の高遠な日本人をつくる役割を担うものは「学校保健」なのである。体育の如く、スポーツの如く華やかではなく、実に目立ぬ存在ではあり、地味ではあるが、いかなる逞しい体力も、驚異の記録も逞しく健康な「からだ」と「心」から生れてくるのである。だから、私どもはまず、「学校保健」を更に強力に推進し、高水準に押しあげねばならない。かくして、われわれは「学校保健」をもつて、オリンピックに参加したいと、心ひそかに念じている。

スポーツと学校保健との関連を語るとき、いつも思い出されるのは、かの日本人最初のオリンピック参加の、マラソンの大先輩金栗さんを育てあげた故日比野寛先生（愛知県立一中校長）の遺訓である。

1. 病めるものは医者にゆけ。
2. 弱きものは歩け。
3. 健康なものは走れ。
4. 強健なものは競走せよ。

洵に簡潔で、而も適切な指針であり、体育保健を通じてのよき遺訓だと思う。処でこの尊敬する日比野先生の晩年のエピソードで、あまり人に知られていない事をつけ加えておきたい。それは「私の信条」（岩波新書P・5）の長谷川如是閑氏の文中の一事実なのである。

「私が『大改朝日』の社会部長の時代に東西対抗競技の初年目だったと思うが、鳴尾の競技場で最後の25哩マラソン競技のとき、日本のマラソンの大先輩の金栗を育てて「マラソン王」と綽名されていた、名古屋の中学校長の日比野寛氏が、初老の年輩でその競技に加つて、さつそうと場外に駆け去つた。ところがすべての選手が競技場に戻つて決勝線を通過してしまつたのに、日比野老一人がいつまで経つても帰つて来ない。とうとう日がくれかかつて観覧席もがらみきとなつたが、「先生はまだ走っている」という連絡があるので、審判始め係員は退散

するわけにゆかず、薄暗くなつた場内に待ちくたびれていると、自転車の連絡員に守られながら、日比野先生はのろのろと、それでも姿勢だけは正しく座つて、係員らのマバラな拍手に迎えられてトラックに入つて来た。そして決勝点を越すと、人々は駆けよつて先生の身体を支えた。

決勝点近くにて、それを見た私は、思わず声をあげて泣こうとした。薄暗がりを幸い、私は人たちの後ろで、ハンカチで顔を掩つた。

この日比野翁のマラソンこそ、私の無意識に求めていた生き方だつたのである。その私の潜意識にあつた理想の生き方の現実の姿を、突然眼のあたり見せられたので、私は電撃のようなショックをうけたのだつた。大観衆の万雷のような拍手に迎えられて、第一着の選手が決勝点に入つて来たのを、たいした感激もなしに眺めていた私だつたが、最後のこの日の日比野先生の姿を見ては、いくら泣いても泣き足りない感激の涙を流さないわけに行かなかつたのである。『……………私もこの頁を読むたびに、ある厳肅さを感じ、目頭が熱くなるのである。そして真のスポーツマンシップというものには神に近い存在だと論えられた。(注：この東西対抗競技最初の大会は大正5年10月28～29日)

第11回近畿学校保健学会 大会プログラム決る

期日	5月17日 日曜日
場所	京都市左京区吉田 京都大学教養部B号館 (市電東山線 東一条停留所下車東)
9.00	開 会
9.10～11.50	一般研究発表 第1会場(演題数16) 第2会場(演題数14)
11.50～13.00	昼食・評議員会
13.00～13.30	総会 (第1会場)
13.30～14.30	特別講演(第1会場) 「現代社会の問題としての青少年非行」 京都大学教授 重松俊明氏
14.30～16.30	シンポジウム (第1会場) 学校保健を如何に強化するか
16.30	閉 会

学校保健をいかに強化すべきか

(シンポジウムの司会に当つて) 川 畑 愛 義

わが国の学校保健を欧米の先進諸国のそれにくらべると二つばかり特徴があるように思われる。その一つは中央集権の色彩が濃いことで、従来の発達が主として文部官僚によつて推進されてきたこと、その二はこれらの当然の帰結として、任野の有識者による独特な進歩と地域的な特性があまり見られないということである。

それではわが国の学校保健の領域においては野に賢人がいなかったかという決してそうではない。とくに近畿の学校保健学会は、今日までむしろ文部省を督励し、指導するような権威者が少なくなかつた。戸田正三先生、竹村一先生、西起三郎先生などのほかにも多数の先覚者

がいられる。このたび竹村一先生、三浦連一先生、東士貞吉先生の御三方が本学会の名誉会員候補者として推せんされるやにうかがっているが、われらは後輩のものとしてはこのような先達のあとに続く光栄と責任を痛感する次第である。

わが国の学校保健は欧米のそれに範を仰いできたものであるが、それでもかなりの特色をもっている。学校健康診断のほか健康教授、衛生訓練など、小学校から大学に至るまでの大系と規模には諸外国においても殆んど類例をみないものがある。その反面、形式的整備や強化のかけに内容や実質の面で子供たちの健康問題がずい分空転しているように思われる。最も徹底しているといわれる健康診断でさへその活用がおろそかにされ、学校給食にしても多くの児童生徒がこれを好まず、健康教授も空文化している場合が少なくないようである。その他挙げれば問題は山積している。

このたび本学会において学校保健をいかに強化すべきかという「シンポジウム」をとりあげたのは極めて意義が深い。といわなければならない。各講師は各府県から選ばれたその道の権威者であられる。単なる抽象論や概念討議に終ることなく、重要な問題を掘りさげ、具体的に、建設的に協議してもらいたいものと願っている。そしてそれらの成果がわが国の学校保健学界をリードするよすがにもなればいつそう幸いである。

第9回近畿学校保健学会を担当して

滋賀県立堅田保健所長

元滋賀県教委 学校保健技師 本 郷 節 哉

第8回近畿学校保健学会は昭和36年6月11日奈良学芸大学で行なわれたが、この近畿学校保健学会の開催地は輪番制になっており、今回は当然滋賀県に来るものと考え、この学会及び評議員会にも出席した。その当時、私は伊良子光義氏（滋賀県学校保健会長）から第9回近畿学校保健学会の世話をたのまれていたが積極的な気持になれなかつた。当日の評議員会では、評議員の整理の件（この当時から一度も学会、評議員会に出席しないかあるいは、連絡のとれない評議員が名簿に記載されていた）、学会事務所の件（会則の変更が必要）日本学校保健学会の件、及び次期学会開催地の件であつた。次期開催地については滋賀県が推選されたが、伊良子氏は、9分までは引き受けるが、後1分は、県教育委員会と協議の上正式に回答するとの返答をされたが、結局は滋賀県が引き受けることとなつた。このように当時の状況からして、学会を単に開催するだけならば出来るが、学会の目的である学校保健に関する研究を行ない健康で文化的な学校生活の建設に寄与することも出来ず、又地方学会として、研究のための知識・技術を練磨し学研徒を養成し、その研究の門を広げて行こうなどは出来ることではなかつた。とくに、この学会が大学及び学校医、に限られたものであるとの印象が歯科医、薬剤師、一般教員の間に強く、その上、滋賀県（他府県でも同様であると思う）では、県学校保健大会が学校保健関係者すべてに研究の場を開放しているので、近畿学校保健学会は屋上屋の感が強く、この事情は京都、大阪のように大学など研究機関が多く、その設備、人員ともに比較的充実しているところと同じように見ることが出来なかつた。このような状態で第8回学会の評議員会8月京大薬友会館で開催され、学会の空気も可成まとまり、幹事が充実して会の事務局は大阪学芸大学となり、歴代会長会を開催することなど決議され会長の会務が円滑に行くとの見通しがついた。かくして、第9回学会運営は滋賀県に移つたが、学会事務局から学会開催に要する

経費補助のないことはいずれの回の学会とも同じであつて、経費の面は当分の間、県学校保健会に、人員の面は最後まで県教育委員会事務局保健体育課（４人）が行ない、形に現われないが学会が終了するまで県教育委員会保健体育課に負担がかかった。その間、９月２２日、旧会長会を開催し各府県から幹事の推選を受け、ついで１１月１８日、幹事会を開いたが滋賀県を除いて大阪、京都、奈良各１名ずつ参会しての（欠席１０名）さびしい幹事会であつたが、近畿学校保健学会幹事会としては最初の集りではないかと思う。この幹事会では主として学会組織の強化として趣意書を印刷（滋賀県が１００００円の経費負担）し幹事が中心となり、（各府県に会員募集の割当量があつた）会員募集することになり、滋賀県は、学会開催と組織強化の仕事の２本立であつた。学会の開催については、県下の関係者で準備委員会を開催し各関係団体で経費を負担していただき、とくに県教育委員会補助、県医師会、県学校保健会で夫々１００００円を支出した。その他に寄附金、印刷、役務奉仕で約２５０００円ほどの寄贈を受け、医学書院は例年によりプログラムの印刷を引き受けていただくことが出来た。

このようにして、４月１６日学会の案内状を発送したが、６月１１日の学会当日までに演題は１８題が集まり内滋賀県７題、大阪７題、京都４題でその他の府県は全く演題がなかつた。この学会で、県下の演者でスライドをストリップのまゝ呈出し、その上撮影方向が一定していないものなど幼稚なものがあつたが、これらの中から学校保健学会に連続して口演を出されている人、あるいは学校ぐるみ学会に参加される学校もあつて、この学会での大きな収穫であつた。学会は滋賀会館中ホールで行かない、約２００名程参集したが、演者のほとんどが口演終了後、口演抄録を呈出しないので、抄録集は９月末頃完成し発送した。他の学会のように抄録のない口演は受付ないようにすれば、経費、手間などが省略出来るが成育しつつあるこの学会では、すべての面に他の学会に見れない苦勞が多い。１０回学会（和歌山）の幹事会では任務から開放されたが、この幹事会で３７年に入会した会員が続いて３８年度も入会しないこと、そのため経費が少くなり事業（機関紙発行など）が流行出来ないことなど（定まった会員制の学会組織は程遠い）から組織強化が議題に出されていた。しかし、昨今は幹事会が頻回に開催され幹事が充実し評議員が整理され、事務局が開催地会長のもとに置かれるようになり善意と誠意で学会が運営して行かれるようになった事は、先に学会を開催したものとして喜びに耐ない。なお、老骨に鞭うつて学会を処理された伊良子会長は学会の終つた翌年健康を害され一時は危篤な状態になられたが９月頃には回復され、同年の全国学校保健大会（熊本）に出席されたことを付記する。

幹事会議事録抄

昭和３９年３月２１日

京大教養部にて

1. シンポジウム講師交渉経過報告
2. 学会開催準備状況報告
3. 評議員推薦 学会活動に熱心な約１２２名の方が推せんされた
4. 学会事務局について 学会開催地の会長のもとに置くことに決定
5. 学会々則の検討 改正案の主要点下記の如し

1. 本会の事務所は学会々長のもとにおく
2. 役員の任期を一ケ年とする
3. 副会長は会長が依頼する
4. 総会開催にあつて、臨時に若干の総会役員をおくことが出来る

昭和３９年 ４月２５日 京大教養部

1. 学会準備状況説明
一般研究発表申込みは３０題を数えたので２会場に別けて発表を行なう
2. 評議員会提出議案について審議